

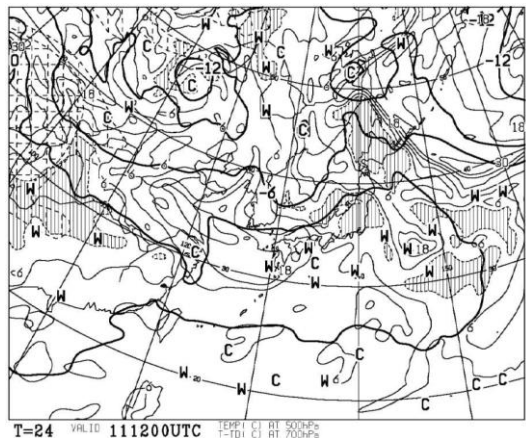
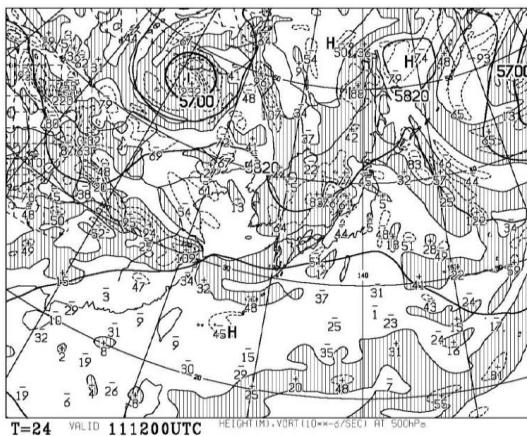
気象コラム(5)

先月、500hpa 高層天気図を使って、夏の高気圧の大きさを把握するひとつの例を紹介しました。また別の話では、夏山で雷が発生しやすい気象状態の目安として、500hpa 高層天気図の -6°C を参考にできると言われています。一般的な 500hpa 高層天気図（実況）は、気象庁ホームページやHBC 専門天気図のサイトなどで確認することができます。

しかし、山に入るときは、明日や明後日の状態がどうなのかを知りたいので、実況天気図よりも予想天気図の方が役に立ちます。

500hpa の予想天気図は、「500hPa 高度・渦度予想図」と「700hPa 湿数、500hPa 気温予想図」の2種類があり、等高度線（気圧配置）は前者で、等温線は後者で確認できます。時間的には、12 時間後 24 時間後 36 時間後 48 時間後 72 時間後の予想図が発行されます。参考のために、それぞれ一例を掲載します。

下図は8月10日21時に発表された24時間後（11日 山の日）の予想図です。



一見「難しそう」と感じるかもしれませんが、見るべき線を把握して注目するとそんなに難しくはありません。実況図とは違い、等高度線（左図）も等温線（右図）のどちらも実線で描かれ、数字も比較的是っきり記載されているので、見つけるのは容易です。左図で5880m等高度線は日本の南海上にあります（日本は高気圧の勢力範囲外）。右図で -6°C の等温線は朝鮮半島のつけ根で折れ曲がっている線です。

アルプスなど高山に行く前には、これらの図を確認しつつ、ヤマテンの予報などを確認してみてもよいでしょう。また、山行前に予想天気図、山行後に実況天気図を確認することで、より理解が深まると思います。

（高田和孝／H.C.teruru）